

# 臨床社会学と専門職

○東京学芸大学 野口裕二

## 1 目的

社会学を基盤とした専門職の可能性を検討することが本セッションのテーマである。筆者は「臨床社会学」という旗印のもとでこれまで研究と実践を重ねてきた（大村・野口,2000, 野口・大村,2001, 野口,2005）。その立場から臨床社会学と専門職の関係について検討することが本報告の目的である。

## 2 臨床社会学の立場

「臨床社会学」という言葉に共通の定義があるわけではなく、研究者それぞれがそれぞれの思いを込めてこの言葉を使ってきた。筆者は「臨床の現場を対象としつつ、その現場になんらかの貢献をすることを志向する社会学」という意味で使ってきたが、この立場において、社会学者自らが専門職になることは想定されていない。すでに存在する専門職、利用者、患者、家族、関係者などにとってすこしでも役に立つ社会的知見を提供することが目標とされてきた。

## 3 専門職化・資格化の実現可能性

社会学を基盤とした専門職や資格を実現するにあたり以下のような障壁が考えられる。

- ①実習先はどこにどれだけあり、どう確保できるのか？
- ②実習先で適切な指導ができる社会学者はどれだけいるのか？
- ③面接技術や関係法令など社会学の知的財産にないことをどのように教育するのか？
- ④どのような就職先がどれくらいあるのか？
- ⑤社会福祉士などの国家資格と競合するとき、どう差別化できるか？

## 4 臨床社会的貢献

以上のような障壁の存在を考えると、専門職化・資格化の道はきわめて厳しいと言わざるをえない。こうした状況の中で、専門職化を目指すよりは、1) 既存の専門職や関係者に役立つ社会的知見を提供する従来の臨床社会的実践を進めること、および、2) 他の専門職の教育プログラムのなかで社会的知見を伝えることが、実質的な貢献の近道である。

2) については、すでに、社会福祉士や看護師の教育プログラムには「社会学」が科目として入っているが、それがこれら専門職の養成にどれだけ貢献しているのかは不明である。抽象的で難解で退屈な暗記科目と思われる可能性もある。福祉学部や看護学部に籍を置く社会学者が共同してこの点について検討する必要がある。

一方で、社会学を学び、それを現場で生かしているが、資格がないためにその価値が認められないような立場にいる人々が存在することも確かである。そうしたひとびとの声を集めて、あるべき方向性を探ることも重要な課題である。

いずれにせよ、社会学はすでにさまざまな形で現場に入り込み貢献している。まずは、その現状を把握し、問題点を探ることが重要である。専門職化・資格化を論ずる前に、現状の把握と社会学の強みの明確化が求められている。

## 文献

- 大村英昭・野口裕二編、2000、『臨床社会学のすすめ』、有斐閣  
野口裕二・大村英昭編、2001、『臨床社会学の実践』、有斐閣  
野口裕二、2005、『ナラティブの臨床社会学』、勁草書房